

なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.20 May 2011

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「なぎさシリーズ」

今回の旅は福沢諭吉の郷里にして鶏の“からあげ”でも一躍有名になった大分県中津市。中津に面する豊前海の干潟を守る漁師と市民の活躍を関根寛（JF全漁連）が取材しました。

なぎさシリーズ No.16

「海と山をつなぐ “ササヒビ ”」

◆ 里山の異変 ◆

五月雨の某日、待ち合わせ場所に現れた足利さんはずぶぬれだった。待ち合わせ場所は港でも干潟でもなく、中津の海から5kmほど内陸の里山。

足利由紀子さんは「中津干潟保全の会」の副会長。そしてNPO法人「水辺に遊ぶ会」の理事長も努めている。「中津干潟保全の会」は大分県漁協中津支店の漁師と「水辺に遊ぶ会」のメンバーが中心となって活動するグループだ。

足利さんを含めた計7名の「水辺に遊ぶ会」のメンバーは五月雨の煙る中、山から竹を運び出す作業の真っ最中だった。



中津の里山は、濃緑色の常緑樹に覆われた丘陵にやや黄色がかった淡い緑色の竹林がパッチワークのように広がっている。山間の平地はほとんどが麦畑。初夏の収穫に向け、水滴をまとった麦の穂が天を指している。大分といえば麦焼酎を思い起こすが、実は竹（マダケ）の生産量が日本一なのはあまり知られていない。杉だらけの関東の山々とはちょっと景色が違う。中津の山は竹だらけなのだ。

「これらの竹林、いろいろ問題が・・・」と足利さん。手入れをすることのなくなっ

	都道府県:	大分県
	地域協議会:	大分県藻場干潟保全地域協議会
	活動組織名:	中津干潟保全の会
	協定先:	中津市
	構成員数:	394名
	対象資源:	干潟
	活動内容:	稚貝等の沈着促進、耕うん、機能低下を招く生物の除去(魚類)、客土、機能発揮のための生物移植



た里山の竹林が周辺の雑木林や畑へと面積をぐんぐん広げているのだという。

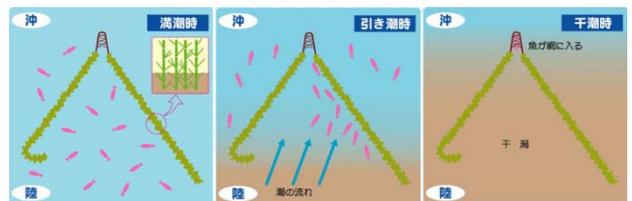
◆ 中津干潟とササヒビ ◆

「中津干潟保全の会」は平成20年から活動を開始したグループで今年が4年目。環境・生態系保全活動支援事業としては3年目となる。その活動は中津市に面した豊前海の干潟、“中津干潟”を守ることだ。中津干潟の総延長は約10km、干潟面積は約1,560haにおよび、干満の差は最大で4mにもなる。山国川が運ぶ砂泥によって作られた広大な河口干潟だ。

その中津干潟には昭和40年代頃まで、ササヒビ漁と呼ばれる伝統的な漁法が存在した。昭和30年代の航空写真には、中津干潟に整然と並ぶササヒビがしっかりと写



っている。目印の乏しいただっ広い干潟にまるで測量したかのようにササヒビを設置するかつての漁師たちの技術には驚くばかりだ。ササヒビの建て方は、3.5mほどに伐った竹の穂先を上にして1.5mほど干潟に垣根のように差込み、陸から見て逆V字状に配置する。干潮と共に中に残されたスズキ（セイゴ）、シロギス、ガザミなどの魚介類をV字状の先端部に追い込み漁獲する漁法だ。かつて一つのササヒビに使用した竹は数万本、垣根の厚さは1m以上もあったという。そんなササヒビも次第に姿を消し、今ではこの伝統的な漁法を行う漁師はいない。



「中津干潟保全の会」はこのササヒビの再現に取り組んでいる。規模はかつてのササヒビの1/3。それでも1万2千本の竹を使ったというからその労力は相当なものであったことが想像できる。このササヒビを設置したのが3年前、すでに一部の竹は腐食しているため、そのような竹が抜けてノリひび（ノリの養殖場）に絡まらないよ

う、新しい竹に入れ替えるメンテナンスが続けられている。

◆ 山から海へ ◆

さて、足利さん達に話を戻すと、合流して挨拶もそこに私達も早速竹の搬出を手伝うことにした。竹の刈り取りは3月までに済ませてあり、野積みして葉っぱを落した竹を2tトラックに積み込む作業だ。1回に運べる量は150本ちょっと、この日は港まで3往復して400本ほどを運搬した。竹の種類はマダケ。太さは3~5cm程度のもので、長さは大体3.5mに既に揃えられている。泥に刺した竹が抜けないう、枝は落とさない。



作業を始めてあっというまに全身ずぶぬれになった。一番怖いのは竹の穂先が跳ねまわることだ。皆さんメガネやゴーグルを着用して目に入るのを防いでいる。今日参加したメンバーは、普段は会社員や公務員、自営業の方々・・・。「みんな素人ですからね、チェーンソーとかも使えないので1本1本手作業で伐りだすんです」と足利さん。とんでもない、皆さん手際がよく、年季が入っていらっしゃる。ことに雨露のおかげで数本束ねて抱えるとずっしりと重い

こと。これは重労働だ・・・とってしまった。

そして中津の港（小祝漁港）には今日運び出された竹が山積みとなった。中途半端に参加しただけだったが、勝手に達成感に浸っている傍で、皆さん埠頭に落ちた竹の枯葉を丁寧に集めている。「竹の葉がノリひびにからまるといけないですから。」と足利さん。実際のところ、市民団体である「水辺に遊ぶ会」と中津の漁師たちとは「豊かな干潟環境＝豊かな漁場」の再生という目的は一緒でも、そこに到るアプローチの仕方には違いがある。だからこそ良い関係、パートナーシップを保つために細やかな気遣いを忘れない。足利さん達のご苦



労が身にしみた。

実は竹の運搬までが「水辺に遊ぶ会」の皆さんのお仕事で、ここで足利さんたちとお別れした。この竹の山をササヒビに仕上げるのは中津の漁師達の仕事。明日は中津の漁師に会える。

◆ 海を耕す ◆

翌日も雨。訪ねたのは昨日竹を山積みした小祝漁港の側にある大分県漁協中津支店。支店長の本田さんと中津の現役漁師であり

「中津干潟保全の会」会長を務める園（その）さんが迎えてくれた。園さんはちょっと怖そうだったが、笑顔でお話くださり、その笑顔がとても精悍な方だった。



中津支店の主な漁業は小型底曳網漁とノリ養殖、そして採貝漁業。かつてササヒビでいっぱいだった場所が現在のノリ養殖業の漁場だ。ノリ養殖の発展とともにササヒビは姿を消した。そしてかつて日本一の水揚げを誇った豊前海のアサリも昭和60年のピークを境に減少し、今では水揚げ量はゼロの状態だという。

ところでササヒビのV字状の直線と角度は測量して出すんですか？「見立てだよ」こともなげにお答えいただいたが、驚かすにはられない。「竹の埋め込みには噴流式のポンプを使っている。竹を刺す海底を



ポンプにより高圧縮された海水で掘削し、1.5m位干潟に刺しこんでいる」と園さん。この方法の場合、竹の差し込みは潮が満ちているときに行うことになる。

今、ササヒビの再現に取り組んでいるのは衰退したアサリ等の生産力の向上が期待されているからだ。何も無い干潟に竹や杭などを設置すると、水の流れが乱れ、渦流（かりゅう）と呼ぶ複雑な水の動きができる。そのような渦流に浮遊してきたアサリの幼生がつかまり、その場に着底するというものだ。つまりササヒビを設置することで、アサリの漁獲量が増えると期待されている。「実際たくさんの稚貝がササヒビの周辺には着底しており、その効果は大きい」



と園さんはいう。「ただ、稚貝はたくさん着くんだが、残らないんだよ」。園さんたちは、干潟の底質に問題があると感じている。そこで底質の環境を改善するため干潟を耕すことにした。耕すことで締まった底を柔らかくし、酸素を送り込む。

この日、その海底耕うんを取材した。現場まで船外機船で連れて行ってもらうと、先に向かっていた園さんのもと、すでに作業が始まっていた。噴射ポンプの排出ホースを取り付けたケタを台船から海底に降ろ

し、えい航船「ふじ丸」で曳きまわすという方法だ。えい航が始まると、海底がぼっ気され、泥が水面まで撒きあがってくるのがわかる。この日は朝の9時から5時間、海底耕うんが続けられた。



◆ 人と里山と里海と ◆

ササヒビの存在は、魚介類にとって単調な環境である干潟に隠れ場ができ、それが生物の多様性につながるという効果も期待されている。そしてササヒビは地元の子どもの環境教育の場としても利用されていて、「中津干潟保全の会」では、毎年夏の大潮の時に子ども達を招待し、干潟とそこに住む生き物について学習する機会を提供している。このような環境が身近にある子ども達がとてもうらやましい。



「ササヒビ漁が盛んな頃は、一山、二山単位で竹を伐り出し浜へと運んでいたそうですよ。」と足利さんが教えてくれた。漁師の高齢化や後継者不足で沿岸の環境維持が難しくなっているように、里山も手入れが行きわたらず、荒廃が進んでいる。里山も里海も守る（維持する）のは人なのだということを実感する。そしてかつて農村と漁村、里山と里海はつながっていたんだということも。「中津干潟保全の会」は農村と漁村、里山と里海を一体的に捉えた活動を進めているのだ。

アサリの減少は全国的な問題となっているが、その原因は未だによくわかっていない。河川水の減少に伴う土砂供給量の減少や栄養塩類の減少、ナルトビエイによる食害等々、広域的な問題が関与しているともいわれている。広域的な問題の解決には、各省庁の管轄や事業の範囲を超えた取り組みが必要な場合もある。その場しのぎの対症療法で終わらないよう、柔軟な対応が私達に求められている。そのようなことは実は現場にいる人達が一番感じていることなのだ。

写真・文：JF全漁連 漁政部 関根寛

写真提供：NPO 法人水辺に遊ぶ会

資料引用：「ササヒビの再現により干潟漁業の将来を探る」（中津干潟保全の会）

～編集後記～

今回の取材で初めて生きたカブトガニを見ました。東京湾の干潟しか知らない私には大変な感動でした。豊かな海、豊かな干潟をずっと守っていきたいですね。ササヒビについては、中津干潟保全の会 WEB サイト「中津んササヒビへようこそ」に詳しく紹介されています。是非ご覧ください。

http://www.geocities.jp/sasahibi_nakatsu/index.html



平成23年度 環境・生態系保全活動支援推進事業のご案内

平成21年度にスタートした「環境・生態系保全対策」も3年目となりました。平成22年度には全国30道府県で本取組がなされ、本年度はさらに新たな地域協議会、活動組織が作られ、その取組みが全国的に広がっているところです。

JF 全漁連では、平成23年度も引き続き、環境・生態系保全対策を全国的、国民的な取組みとして推進、普及するため、国からの補助を受け、「環境・生態系保全活動支援推進事業」を実施してまいります。

この事業では、全国各地で取組まれている保全活動の情報提供や普及および活動組織に対する技術的なサポートを以下のとおり実施いたします。この事業に取組まれている皆様には是非ご活用いただきたく、ご案内いたします。

項目	概要
①事例発表会の開催	・年2回（10～11月を予定）、東京都などの都市部において、保全活動の事例発表会を開催します。
②普及・啓発活動	<ul style="list-style-type: none"> ・「海のゆりかご通信」を発行し、活動組織の取り組みを紹介します。 ・環境・生態系保全対策 WEB サイト「ひとうみ.jp」において、保全活動に関わる情報を公開し、情報交換の場を提供します。 ・その他事例発表会での事例等を取りまとめ、情報提供します。
③技術講習会の開催	<ul style="list-style-type: none"> ・活動組織のリーダー等を対象に、技術水準の向上を目的とした講習会を開催します。 <ul style="list-style-type: none"> ・藻場講習会（北海道）：9月以降開催予定 ・藻場講習会（調整中）：未定 ・藻場講習会（大分県）：7月開催予定 ・干潟講習会（山口県）：7月開催予定 ・浅場講習会（調整中）：未定 ・サンゴ礁講習会（調整中）：未定 ・ヨシ帯講習会（調整中）：未定
④技術サポート	・保全活動やモニタリングの専門家が活動組織を訪問し、技術的な指導や助言を行います。

技術講習会の開催地や日程などの詳しい情報は、「海のゆりかご通信」次号以降で随時お知らせしていきます。ご不明な点やご相談がありましたら下記までご連絡ください。

JFグループ東北地方太平洋沖地震被害支援金等募金運動（がんばれ漁業募金）の報告とお礼

JFグループの全国運動により、5月24日までに寄せられた義援金は1,975,211,458円となりました。このうち1,900,000,000円を5月31日付で第一次配分として各被災県のJF災害対策本部等へ送金いたしました。皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。被災地復興のため、引き続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。

JF 全漁連 漁政部 環境・生態系チーム 田中・矢部・関根

TEL : 03 (3294) 9616 (直通) e-mail : k-support@zengyoren.jf-net.ne.jp